

総合開館 20 周年記念

TOP コレクション

「コミュニケーションと孤独—平成をスクロールする 夏期」

会期：2017年 7月15日(土)—9月18日(月・祝)

会場：東京都写真美術館 3階展示室



北島敬三 《Suga Chitose Oct. 28, 2005》
〈PORTRAITS〉より 2005 (平成 17) 年
発色現像方式印画

TOP コレクションは、34,000 点を超える東京都写真美術館の収蔵作品のなかから、毎年ひとつの共通テーマで、春期、夏期、秋期の 3 期にわたり作品を紹介する展覧会シリーズです。「平成」というテーマ性で写真・映像作品を見ていくことで、どのような時代の姿、「平成」らしさが見えてくるのでしょうか。

他者とのコミュニケーションの複雑化が進んだ平成期においては、肖像権や個人情報の観点などにより、写真表現そのものを取りまく状況にも大きな影響を与えました。

「コミュニケーションと孤独—平成をスクロールする 夏期」展は、当館が近年収蔵した写真作品を中心に、日本の現代作家の表現を通して、作家と被写体との関係性にはどのような変化が起きたのか、その背景にある社会性や文化状況を照らし出します。

コミュニケーションと孤独

メールやインターネットの普及、肖像権侵害や個人情報保護、ひきこもり、コミュニケーション障害など、おもに平成という現代に起き始めた現象により、他者とのコミュニケーションのはかり方、人やものとの距離の取り方は変化し、複雑化が進んでいます。写真というメディアは、現実の人、もの、風景、出来事など、被写体と直接対峙することによってできあがるもので、撮影者と被写体の二者間におけるコミュニケーション、関わりが必須となります。本展では、「人」と「人」や、「人」と「もの」など二つ以上のものの中に生まれる、もう一方を理解しようとする関係性を、広くコミュニケーションととらえています。写真によって作品を制作する作家たちが、こうした状況のなかで何を撮影し、表現しようとしているのか、そして「作家」と「被写体」、「作家」と「鑑賞者」との関係性にはどのような変化が起きているのかを探ります。

セクション紹介

1 対話

作家は被写体と直接対峙し作品がつくられます。作家と被写体の間で紡がれるコミュニケーション、対話は作品にどんな表現をもたらしているのでしょうか？

1—長い対話

北島敬三は、一定の撮影環境のもとで何年にもわたり、特定の被写体を撮影したポートレイトのシリーズ〈PORTRAITS〉を制作しています。特徴のない服装で無表情にたたくそれらの作品からは長年の作家と被写体とのコミュニケーションさえも感じるこのできない距離感が漂います。北島のそれまでの路地裏や夜の街のスナップショットなど被写体と接近した作品と比較してみると、不思議と時代とともに変化してきた対人コミュニケーションの距離感とかなさり、同時代的なリアリティが増幅します。

中村ハルコは1993年から5年間の間、イタリア・トスカーナ地方に幾度となく通い彼女が魅了された風景とそこに暮らす家族を撮影しています。中村と作品に写る人々が愛する風景を通じた深い親交の様子は、人々の表情、光、空気感、そして素朴な営みのなかの、ふとした瞬間にあらわれる生や死を表す1コマから垣間見られます。



左：北島敬三《Shimizu Makoto Dec. 4, 2008》〈PORTRAITS〉より 2008（平成20）年 発色現像方式印画
右：中村ハルコ〈光の音〉より 1993-98（平成5-10）年 インクジェット・プリント

2 つくる側とうつる側の往還と対話

森村泰昌は、名画や有名人に自ら扮したセルフポートレート作品を制作する作家です。

セルフポートレートには、同一人物である被写体と作家による対話が含まれており、特に〈創造の劇場〉シリーズは、アーティストである森村が、世界のアーティストに扮することでアーティスト同士の対話がおこなわれています。

やなぎみわは、モデルに彼ら自身の50年後の未来をインタビューし、それをもとに50年後の写真をモデルとともに作りあげていきます。普段は見られる側であるモデルは、一旦、未来の自分を想像することで見る側にまわり、想像の中で見た「見られたい自分」の情景をやなぎと作りあげていきます。つくる側とうつる側の往還は、どこか現実味がなく、作品が近未来的に見える効果を高めているようです。



左：森村泰昌《創造の劇場／パブロ・ピカソとしての私》〈なにものかへのレクイエム〉より 2010（平成22）年 ゼラチン・シルバー・プリント

右：やなぎみわ《MIWA》〈マイ・グランドマザーズ〉より 2001（平成13）年 発色現像方式印画

3 一自分の歴史との対話

石内都の〈mother's〉は自身の老いた母親の身体を丹念に撮影し、死後は遺品を撮影したシリーズです。歳月を経たことで、撮影する行為が葛藤の深かった母と交わすことのできる言葉を越えた対話、コミュニケーションとなりました。1枚1枚が母と石内自身の歴史、そして一人の女性の歴史との対話でもあるのです。

大塚千野は自分の子供の頃のスナップショットの中に現在の自分を入れ込んでいます。「タイムマシンに乗りこみ、私がかつて居た場所へ、訪ねた場所へ、自分史をめぐる旅にでる。」というように、写真のなかでの幼い自分との再会は、時を重ねた今だからこそ辿りなおすことのできる自分の歴史との対話なのです。



左：石内都《25 Mar 1916 #31》〈mother's〉より 2000（平成12）年 ゼラチン・シルバー・プリント

右：大塚千野《1982 and 2005, Paris, France》〈Imagine Finding Me〉より 2005（平成17）年 発色現像方式印画

2 らしさ

男らしさ、女らしさ、あなたらしさ、こどもらしさなど、これまでずっと「らしさ」でくくってきたイメージは、一つの見方の紋切り型であり、昨今では、多様性の需要が高まることにより、「らしさ」をとおして人を見ることが、思い込みや、誤解などのディスコミュニケーションを招くこともしばしばです。

オノデラユキの作品に浮かび上がるシルエットの中には多種多様なイメージが浮き出しています。これらのイメージは、外見からでははかり知ることのできない、個人が持つ趣味趣向の多様さをレントゲン画像で透かし見ているようです。

菊地智子は、中国のトランスジェンダーやドラァグクイーンを撮影しています。菊地の作品には、自身の中の様々な葛藤や他者からの誤解を乗り越えた、人々の覚悟や生き様を見ることができます。



菊地智子 《鏡の前のグイメイ、重慶》〈I and I〉より
2011（平成23）年 インクジェット・プリント

3 作品とのコミュニケーション

人対人ではありませんが、作品とそれを見る人（鑑賞者）の間には、もう一方を理解しようとする関係性があります。作家は人に伝えるというコミュニケーションを前提として作品を制作し、見る側はそれを読み取ろうと働きかけます。

林ナツミは、ジャンプをして地面から脚が離れた状態の瞬間を撮影した作品を制作していますが、彼女の作品はウェブサイトのブログで発表されています。これまで、プリントを直接見る、あるいは作品集という具体的な存在をもって作品と見る人がつながっていたコミュニケーションは平成の今、世界中の人々が液晶画面をとおして簡単に作品とつながることができるようになりました。

屋代敏博は様々な場所で自身が回転している姿を撮影し作品を制作します。もともとは屋代が一人で被写体となっていたのですが、その後一般の人々にも回転してもらい撮影しています。普段は作品を見る側の一般の人々が、主体的に画面の中に入り、屋代の指揮の下に回転することで、ただ作品を見るよりも深く作品を理解し、鑑賞するきっかけとなっています。



屋代敏博 《恵比寿ガーデンプレイス》〈回転回 LIVE!〉より
2008（平成20）年 発色現像方式印画

4 コミュニケーションのなかの孤独

孤独とは、「ひとり」のことですが、ひとりでなく大勢の中にいるからこそ孤独を感じることがあります。また、自分以外の誰かと場所や立場が「共にいる」状態と比較して、「ひとり」だったときに孤独の感覚が起こります。

津田隆志は、真冬の北海道から8ヶ月かけて自転車で日本一周をしました。その際、各地で出会った人に「この近くでテントを張れそうな場所」を訊ね、その場所にテントを張り一晩過ごすというルールを設けています。旅先での見知らぬ人々との寝場所を探すためのコミュニケーション、そして知らぬ場所で、(時には極寒の地で)一人テントのなか眠る孤独が毎日繰り返されることで、作品がつけられました。

郡山総一郎は、孤独死を遂げた人々の住まいを撮影しました。直接の対面を伴わないヴァーチャルなコミュニケーションが発達したこの時代の中での孤独死の増加は、この2つが表裏一体であることを伝えているようです。彼のカメラが捉えた風景は、孤独死という特別な言葉で語られる死が起きたことを説明されなければ、ほとんど気づかないほど、どこにでもある何の変哲もない日常的な風景で、整然と片付いていないことがむしろ生活をより強く感じさせています。これらの室内が日常的であればあるほど、死というものが、いつでも誰の暮らしのすぐ隣にもあるということを感じずにはいられません。また、その逆にいま生きていることを強く実感することでしょう。



左：津田隆志〈SITE〉より 2013(平成25)年 発色現像方式印画

右：郡山総一郎〈Apartments in Tokyo〉より 2013-14(平成25-26)年 発色現像方式印画

[出品予定作家] 14名

石内都、大塚千野、オノデラユキ、菊地智子、北島敬三、郡山総一郎、高橋ジュンコ、津田隆志、中村ハルコ、林ナツミ、ホンマタカシ、森山泰昌、屋代敏博、やなぎみわ

[出品予定点数] 約120点(すべて東京都写真美術館蔵)

このリリースに掲載されている図版(参考図版を除く)をデータにてご用意しております。

掲載点数が1点の場合は、展覧会メインイメージとして、本リリース1ページ目の

北島敬三《Suga Chitose Oct. 28, 2005》〈PORTRAITS〉より 2005(平成17)年 発色現像方式印画 をご提供させていただきます。

※図版をご掲載の際は、必ず作品キャプションおよびクレジットの表記をお願いします。

※図版のトリミング、文字カブセはできません。

関連事業

学芸員によるギャラリートーク

会期中の第1・第3金曜日 16:00 より担当学芸員による展示解説を行います。本展チケット（当日消印）をご持参のうえ、3階展示室入り口にお集まりください。

じっくり見たり、つくったりしよう！

出品作品に写っているものについて参加者全員で対話をしながらじっくり鑑賞した後、簡単な写真制作を行います。*作品解説ではありません。

日時 2017年8月19日（土）、20日（日）いずれも 10:30-12:30

対象 小学生とその保護者（2人1組）

定員 各日10組 事前申込制、先着順。

参加費 800円（別途本展観覧チケットが必要です）

視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ

障害の有無にかかわらず、多様な背景を持つ人が集まり、言葉を交わしながら一緒に美術を鑑賞するワークショップです。

日時 2017年9月3日（日）10:30-12:30

対象 どなたでもご参加いただけます。

定員 20名 事前申込制、先着順。

参加費 500円

※申込方法など詳細は決まり次第、当館ホームページでお知らせいたします。

また来たくなる！「TOPスタンプラリー」

TOPコレクション「平成をスクロールする」展では、春期、夏期、秋期の3つのシーズンをとおして、TOPオリジナルグッズがもらえるスタンプラリーを開催中です。3つの展覧会を観覧して2つ以上スタンプを集めると、すてきなオリジナルグッズがもらえます。

スタンプカード配布期間 5月13日（土）-9月18日（月・祝）

スタンプラリー実施期間 5月13日（土）-11月26日（日）

春期「いま、ここにいる」展 5月13日（土）-7月9日（日）

夏期「コミュニケーションと孤独」展 7月15日（土）-9月18日（月・祝）

秋期「シンクロシティ」展 9月23日（土・祝）-11月26日（日）

展覧会図録

『TOPコレクション 平成をスクロールする』

春期、夏期、秋期を含むTOPコレクション展より、代表的な出品作品と担当学芸員のテキストを掲載。

編集・発行：東京都写真美術館 A4変形 160ページ 1,500円（税込）

次回予告

総合開館 20 周年記念 TOP コレクション 「シンクロニシティー平成をスクロールする 秋期」
会期：2017 年 9 月 23 日(土・祝)ー11 月 26 日(日)

世紀転換期において、モダニズムという「大きな物語」やマス・コミュニケーションの力が減退するにつれて、私たちが「現実」と呼んでいるこの世界の在りようをめぐりイメージは変容してきました。平成の時代の写真・映像作品は、「現実」のあいまいさや多義性を様々な視点から、小さな「現実」や小さな「物語」として描き出してきたと言えるでしょう。シンクロニシティとは、同時に起こるばらばらな物事が一致したり、共通したりする現象を言います。本展では平成の写真家たちが捉える個々のリアリティのつながりや響きあいを新たな視点から検証します。

[出品予定作家] 新井卓、大森克己、金村修、川内倫子、北野謙、志賀理江子、鷹野隆大、蜷川実花、野口里佳、浜田涼、原美樹子、米田知子 ほか



左：原美樹子《Untitled》〈発言の周縁〉より
2004（平成 16）年 発色現像方式印画

右：大森克己〈サルサ・ガムテープ〉より
1998（平成 10）年 発色現像方式印画

開催概要

主催 東京都 東京都写真美術館

会場 東京都写真美術館 3 階展示室

東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

Tel 03-3280-0099 URL <http://topmuseum.jp>

開館時間 10:00～18:00（木・金は 20:00 まで）

ただし、7 月 20 日(木)～8 月 25 日(金)の木・金は 21:00 まで開館

※入館は閉館時間の 30 分前まで

休館日 毎週月曜日（月曜日が祝日の場合は開館、翌平日が休館）

観覧料 一般 500(400)円／学生 400(320)円／中高生・65 歳以上 250(200)円

※（ ）は 20 名以上の団体料金 ※小学生以下および都内在住・在学の中学生、障害者手帳をお持ちの方とその介護者は無料

※第 3 水曜日は 65 歳以上無料 ただし、7 月 21 日(金)～8 月 25 日(金)の毎金曜日 18:00-21:00 はサマーナイトミュージアム割引（一般 400 円／学生・中高生 無料／65 歳以上 200 円 ※各種割引の併用はできません）

お問い合わせ先

総合開館 20 周年記念 TOP コレクション 「コミュニケーションと孤独ー平成をスクロールする 夏期」

〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内 東京都写真美術館

Tel 03-3280-0034 Fax 03-3280-0033 <http://topmuseum.jp>

展覧会担当 武内厚子 a.takeuchi@topmuseum.jp

広報担当 久代明子、平澤綾乃、前原貴子 press-info@topmuseum.jp